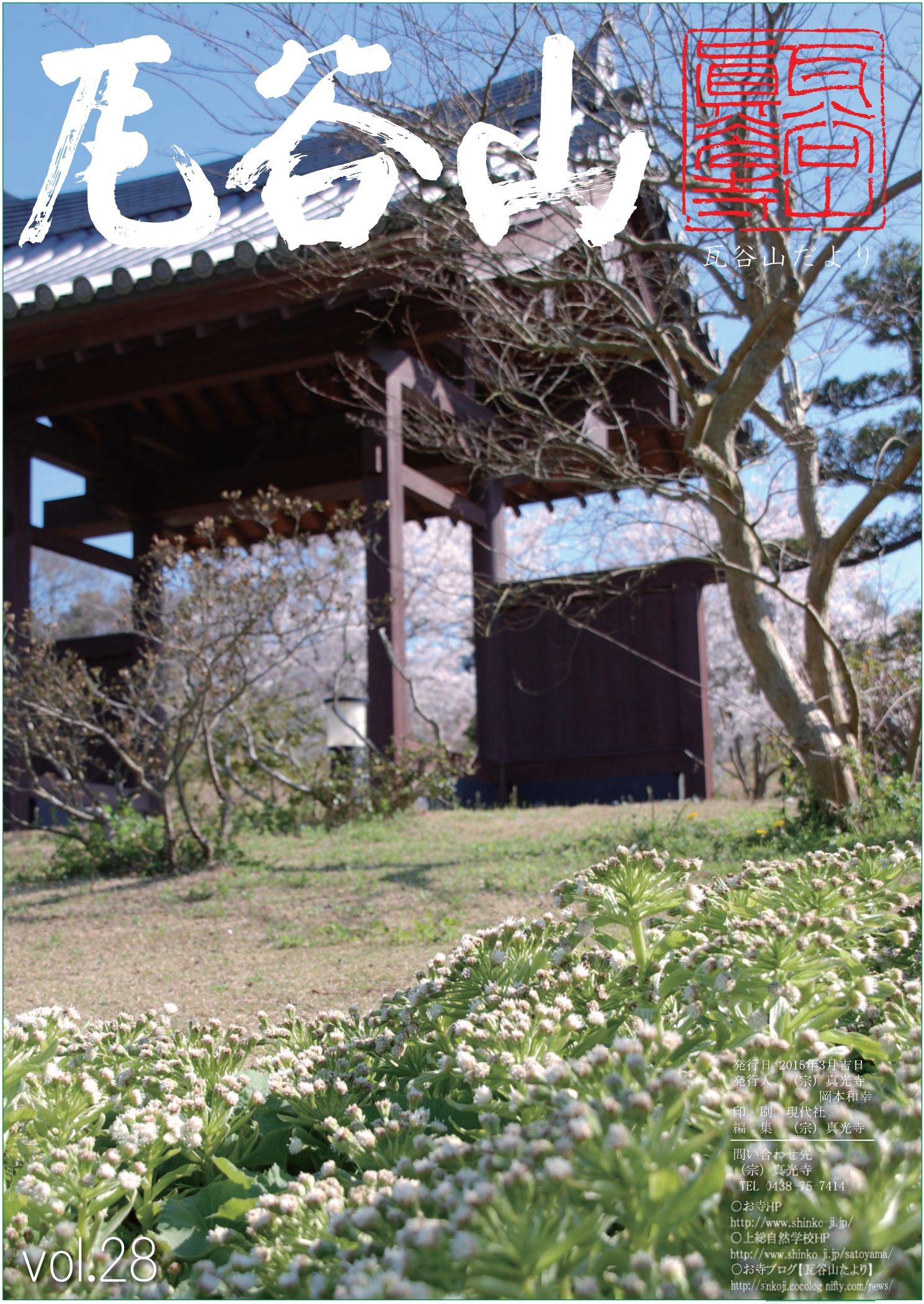
瓦谷山

瓦谷山だより



vol.28

発行日　2015年3月吉日
発行人　（宗）真光寺
　　岡本和幸
印　刷　現代社
編　集　（宗）真光寺

問い合わせ先
（宗）真光寺
TEL 0438-75-7414

○お寺HP
http://www.shinko-ji.jp/
○上総自然学校HP
http://www.shinko-ji.jp/satoyama/
○お寺ブログ【瓦谷山だより】
http://shinkoji.cocolog-nifty.com/news/

ごあいさつ

真光寺の花々が咲き誇る春を迎えました。冬の間に木を切り倒し、十分に光が当たるよう空間を広げた成果が目に見える楽しみな時期の到来です。上空をさえぎる古い木を切ることで、若い木は大きく成長していきます。地球の営みの中では、ひとつの命の死は別の命の再生を意味します。

生命は時の流れにしたがって自然に生まれ、死ねば無為に帰ります。体は朽ちて自然に戻っていきますが、有為(うい)の世界に住む私たちは死を恐れ、骸(むくろ)を忌避してできるだけ遠ざけようとします。しかしそれは本来汚いものでも厭(いと)うべきものでもありません。仏教の葬儀では故人を成仏させ、祈りによって送りますが、それは端的にいえば、有為なる遺骸を無為なる存在に昇華させ、自然に返すための儀式です。

元来葬儀は地域コミュニティーの中で醸成されてきたもので、今日行われている葬儀法は、宗教主導で確立されたわけではありません。昔ながらの習俗が残る地方の葬儀をみると、宗派が違っても儀礼の流れはほとんど同じであり、中には仏教の教理と矛盾する民俗的な伝承も含まれていたりするのが証左であるように思います。

日本においては人の死をめぐる一連の作業に、かつてコミュニティーの中で一定の役割を果たしてきた僧侶が関与することによって葬儀と僧侶のつながりが強固なものとなりましたが、葬送儀礼の中では、喪主や親族、地域の人たちから会葬者に至るそれぞれに役割があり、人々はそれをつとめることによって故人を送り出す気持ちを示します。従来はそのようにして通夜葬儀から何年かごとの法事にかかわっていくことで、故人が成仏して無為の世界に入っていくのを見守ると同時に、自らの存在意義も再確認できたのであろうと思います。

コミュニティーが崩壊してしまった今日、葬儀を行う意味もなくなったと言う人もいますが、それは誤った見方だと思います。なぜならば人の死は、必ずまわりの人たちに大きな影響を与えるからです。

本年一月に母が亡くなりました。秋の深まりとともに食が細り、寒さのせいかと思っていたところ、たちまちにやせ衰え、暮れに入院したまま帰らぬ人となりました。広島に生まれ育った母は、十五年前に事故に遭って腰椎を骨折し、九年前から真光寺の旧庫裡に居住しておりました。檀信徒専用墓地「渓照苑」が完成してからは、不自由な身体ながらも掃除を生き甲斐に、元気な晩年を過ごさせていただきました。多くを語らないままに逝ってしまいましたが、檀信徒の皆様からお声掛けいただくことが何よりも心の支えとなっていたように思います。これまでの皆様のご厚情に、心より御礼を申し上げます。

先代住職の妻というわけでもなく、遠方の出身で当地の知人もごくわずかでしたので、通夜葬儀は山内に親族だけが集まり、ごくささやかに行うつもりでおりました。しかし情報が漏れ出たことで、檀信徒の皆様を始め地域の方々のご焼香を賜り、暖かくお送りいただきました。通夜当日は薄暮の中、どんどん人が増えてゆく境内を見て、こみ上げてきた熱い思いを今もなお忘れることができません。檀家のご婦人が、「一緒に悲しもう、一緒に送ろう」と言ってくださったとき、悲しみの共有が大きな支えになることを、身にしみて感じました。

入院中は、妹も仕事の休みを取って広島からやって来ては病室へ通いました。しかしまだ幼い甥たちは、可愛がってくれたおばあちゃんが日に日にやせ細っていく姿を怖がり、近くに寄るのさえためらっていました。亡くなった時も同様で、遠巻きに見つめているだけでしたが、葬儀が始まり、親族や檀信徒の皆さんが母にお別れを告げる姿を目の当たりにすると、彼らなりに何かを学んだようで、出棺の際には率先して棺を花で飾りつけてくれました。

お釈迦様が涅槃に入られるとき、たくさんの仏弟子や在家信者、果ては動物たちまでが集まったと、お経に書かれています。彼らに対し、お釈迦様は最後の説法として、「世の中に常なるものなどない。無常が世の真実であるから、私の肉体も滅ぼうとしているのだ。しかし悲しむことはない。お前たちが

私の教えを受け継いでいけば、私は教えとして生き続けるだろう」と言い残されました。死に赴く人をわが身に置き換えて、人はいずれ衰えて死ぬのだから、今を大事に懸命に生きていかねばならないと心に刻み、大切な人の死を悲しむ姿を見て、別れはつらいものだから、あらゆる命を大切にしなければならないということを学ぶ、それこそお釈迦様が自らの臨終をもって私どもに提示された最も大切な教えでありましょう。

真光寺各所では、目下さまざまな工事を行っております。職員による自主工事ですので、相応の時間を要します。充分な注意を払ってはおりますが、お参りの際にはくれぐれもご注意ください。皆様の御参詣を、山内一同心よりお待ちしております。

合掌　住職　岡本　和幸

行事報告

◇修正会〔一月三日〕

一月三日に修正会法要が行われました。修正会とは一年の始まりに、いま一度我が身を振り返り自らを修正し、新たな年の決意をする年頭の法要です。

法要前には真光寺の四百五十年記念事業諸堂建立において、心篤くご尽力いただいた役員十二名に住職より感謝状が贈られました。

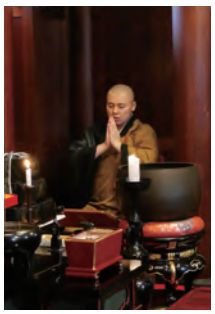
感謝状が贈られた十二名

髙吉　晋　様　　小沢　廣　様
松澤　誠治　様　　小沢　誠一　様
小山　孝　様　　田中　隆　様
井内　満　様　　島田　孝平　様
髙吉　俊雄　様　　髙吉　文夫　様
川嶋　清　様　　松澤　正男　様

◇七日法要〔二月七日〕

午前は授戒式（参加者十三名）月例供養、午後は坐禅と写経を行いました。

この日は以前、平成二十一年四月から約一年半、東長寺から真光寺に赴任していました諏訪師が東長寺を退職し福井県の自坊へ帰ることとなり、最後に真光寺の法要に参加いたしました。諏訪師『真光寺ではとても勉強になる事ばかりでした。方丈様はじめ職員の皆様、檀信徒、縁の会の皆様、本当にお世話になりました。』



昼食の献立（七日法要）

・古代米ごはん　真光寺米
・玉子すうぷ
・炒物　大豆肉　馬鈴薯　椎茸　蓮根
　　甘栗　人参　カレー風味
・南瓜とひじきの煮凝り風ふきのとう添え
・香菜　昆布ときくらげ

《南瓜とひじきの煮凝り風》
材料：南瓜・ひじき・寒天・だし汁

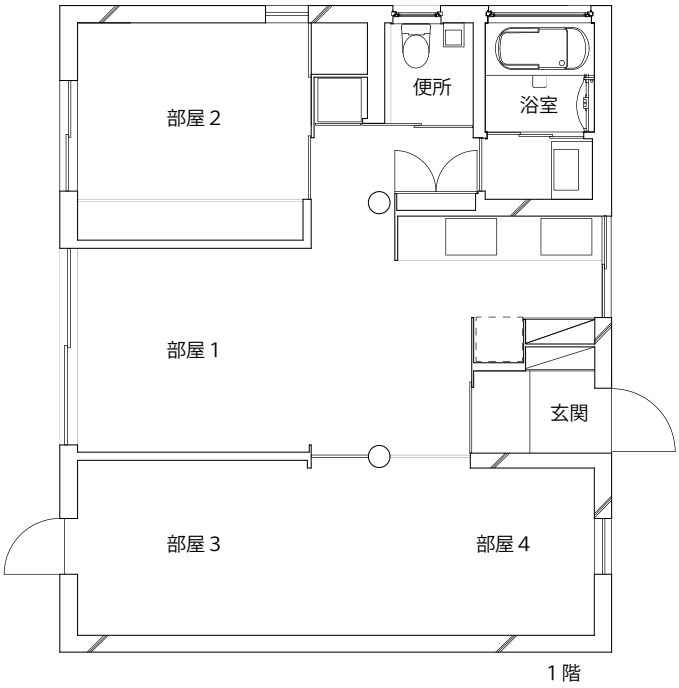
❶南京とひじきはそれぞれ別の鍋で醤油、みりん、酒で味をつけて煮る。
❷南瓜は柔らかくなったらしゃもじ等であらかじめ潰し、そこへ❶のひじきを入れほどよく混ぜる。
❸型に❷をいれ、だし汁が底まで入るように隙間をつくりながら平にのばす。
❹だし汁に寒天を溶かしたものを❸に流し込み、だし汁が濁らない程度にざっくりとかき混ぜ、冷蔵庫でかためる。
❺器に切り分け、お好みでゆず味噌などを添えて出来上がり。
※精進料理では肉魚類、辛味や臭気の強い5種の野菜、大蒜（にんにく）・韮（にら）・葱（ねぎ）・辣韮（らっきょう）・野蒜（のびる）は情欲を促進するといわれ、修行の妨げになるため、修行道場ではこれらの野菜は使いませんが、真光寺では皆様からの頂き物やお寺の畑でとれた新鮮野菜を元にお出ししております。

新書院建設計画

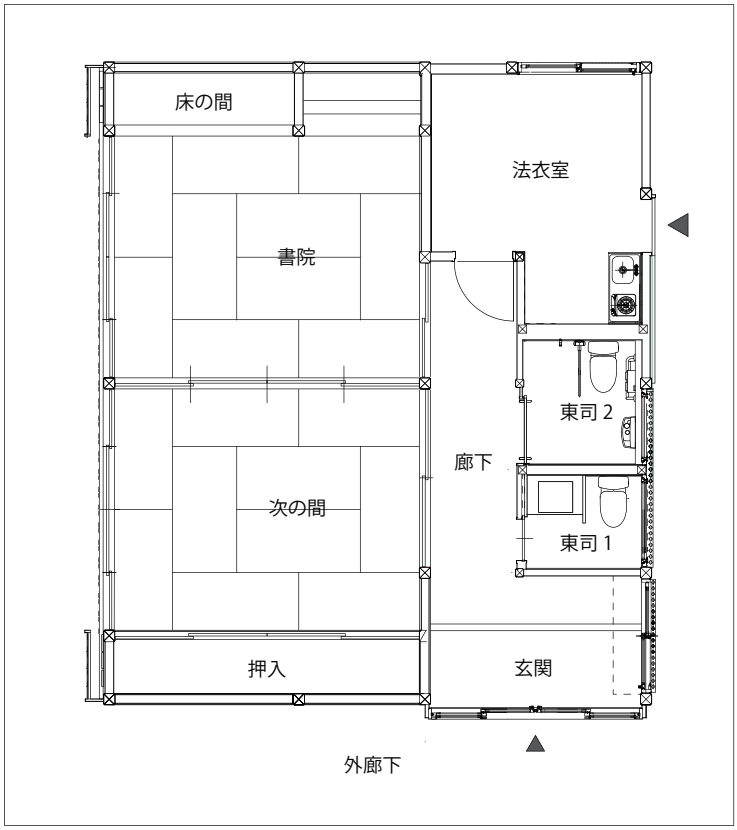
真光寺では縁の会をスタートしてから九年目を迎えます。これまで行事の充実と布教に務めてまいりました。現在では多い日で、四行事を同時進行することもあり、その際、皆様の待合所とお食事の会場となる食堂（じきどう）と現書院のみでは、その運用が綱渡り状態となり、いつかご迷惑をおかけすることが懸念されていました。そこでかつてからの願いであった新書院の建設計画を実行することといたしました。

新書院は二階建の建物で、一階は僧侶の宿泊施設として、二階はご法事の後席や待機場所として、またお通夜や各種行事の宿泊施設として利用する予定です。特に法事のお受けが多くなる土日に葬儀をお受けすることとなった場合を考えると、とても頼もしい施設となります。これから数回に分けてこの建築工事の進捗を皆さまにお伝えして参ります。

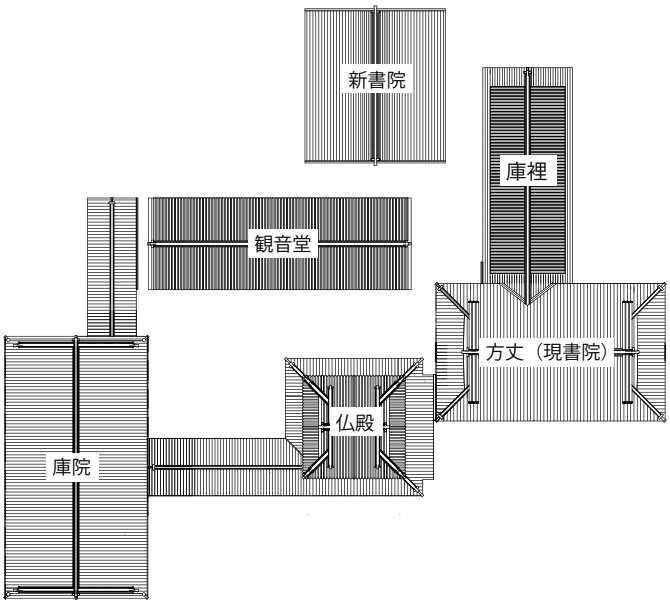
これまで本計画は設計段階でした。当初、定められた予算内で進行することと、開発協議で定められた期間内で納めることが最重要課題でしたが、東京オリンピックに合わせた建設物価の高騰で同一仕様ながら予定の2倍もの見積りとなり、大幅な仕様変更が求められるようになりました。しかしながら、寺院建築としてのしつらえと伽藍全体のバランスを保つことも重要ですから、この点において設計は難航いたしました。現在では次の図のような仕様が考えられていますので、ご紹介いたします。



１階



２階



＜新書院概要＞
構造：木造+鉄筋コンクリート　2階建て
建築面積：102.30㎡
延べ床面積：146.76㎡
外壁：漆喰塗り、杉板張り
内壁：漆喰塗り
工期：15年4月～15年12月

真光寺職員紹介

事務局員　町田　敦

「お坊さんですか？」

お寺に来られた方にこう聞かれることが時々あります。写真をご覧いただくとその理由がなんとなくお分かりいただけるかと思いますが、私の風貌はお坊さんそのものです。しかしながら、お寺で働いている、私のような頭をした人（特に男性）を目にした場合、通常であれば疑う余地もなくお坊さんだと思われるはずですし、大半の方は私をお坊さんと信じて疑わないと思います。ではなぜそのような質問をされるのか。それは私の頭と服装のギャップによるところが大きいのではないかと思います。一般的にお坊さんはお袈裟や作務衣を着てお寺で働いていらっしゃいますが、私はだいたい洋服でおります。ごくまれに作務衣を着用することもありますが、お袈裟を着ることはありません。真光寺では月に何回か樹木葬の見学会を開催しており、私は見学者の方のご案内をさせていただいているのですが、その際の服装も洋服です。皆さんの疑問は、「あの人お坊さんみたいな頭をしているのにどうしてお坊さんの格好をしていないのだろう」というところからきているのではないかと思います。答えを申し上げますと、私はお坊さんではありません。お坊さんの修行をしたこともありません。ただ単に頭を丸めているだけの事務員でございます。

さて、このように書いているとお坊さんと間違えられることに対してまるで憤りを感じているのではと思われそうですが、全くそのようなことはございません。むしろお坊さんと間違えられることで、ちょっとしたコミュニケーションの種にもなりますし、場がなごむことも多々あります。お寺の風景にもよくなじめますし、このような頭に生んでくれた（？）両親やご先祖様には本当に感謝です。

私は平成二十五年の一月から真光寺で働かせていただいており、間もなく三度目の春を迎えようとしております。出身は埼玉県の狭山市というお茶の名産地で、真光寺に来る前は料理の仕事や建物の設計の仕事に携わっておりました。何年か前に千葉県の印西市で保育園を設計したこともあり、多少ですが千葉には縁がありました。

その後縁あって、同じ事務局員でもある椎野氏からお誘いをいただき真光寺で働くこととなりました。お寺で働いているということを話すと、大抵の友人、知人には驚かれます。しまいにはとうとう出家したのかと言われる始末です。そもそもお寺で働くということ自体が世間では稀なことであるため、皆が私の仕事に興味や疑問を持つようです。ちなみに私の基本的な業務は椎野氏とほぼ同じですので、詳しく知りたい方は寺報Ｖｏｌ．２０の椎野氏の職員紹介をご覧ください。

お寺で働かないかと誘われた時には正直どのような業務内容なのか半分は興味津々、もう半分は恐る恐るでした。しかし、岡本住職をはじめ、お寺で働く皆さんや檀家さん、縁の会の会員さんに助けられ少しずつお寺での業務や心構えを身につけることが出来、未熟ながらもなんとか日々の業務をこなせるようになってまいりました。

一昨年の秋には永平寺の団参旅行にも同行させて頂き、大本山に参拝させていただくという貴重な体験もさせていただきました。何よりも、永平寺での修行体験や瑞龍寺、飛騨高山の旅を通じて檀家さんや縁の会の皆さんとのご縁を深めることが出来たということが一番の思い出です。この旅行がきっかけで仲良くさせていただいている縁の会の方がお寺に来られて顔を見せていただけるのも今では楽しみの一つとなりました。

また、私が設計の仕事をしていたこともあり、今年の3月から建設工事が始まる新しい書院建設に関するとりまとめをさせていただいております。この建物が皆さんに喜んでいただけるよう一所懸命取り組ませていただいております。

真光寺から始まった素晴らしいご縁が更に広がっていくようにと願い、真光寺での仕事や行事だけではなく真光寺の周辺地域にも何か貢献できないかと考え、個人的に住職の許可を得て真光寺の近くにある山の竹やぶ整理を始めました。このような活動を通して生まれる数多くの“ご縁”を大切にしていければと思います。

まだまだ至らない点も多々あり、皆様にご迷惑をおかけすることもしばしばですが、日々精進して参りますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

上総自然学校（里山再生活動）

お米作りの季節には多くの参加者でにぎわっていた里山ですが、寒さが増すにつれて静寂の季節が訪れます。数年前はこの時期に何度か行われていた「森林整備」イベントですが、寒い時期であるということもあり、人数が集まらず苦戦した年が続きました。去年は台風後の復旧作業がありましたので開催を致しませんでした。そんな冬の里山の整備作業ですが、今年は「里山の道作り」をやっています。上総自然学校のフィールドには明るい森、暗い森、開けた谷に狭い谷と変化に富んでいます。そんな里山全体を一周りできるトレッキングコースを作り、それぞれの季節の里山を感じられる環境作りを目指しています。とはいえ寒い季節ですので、今のところ参加の申し込みはあまり多くありません。来冬こそ多くの方々が楽しんでご参加いただけるようにしていきたいと思っております。もちろん春からはお米作りイベントや観察会などもございますので、そちらにも皆様ふるってご参加ください。（糸田）

道作り。間伐した材を使って階段を作っていきます。１段作ってはまた１段。振り返ると、何ともいえない達成感があります。

お餅つき。この日はとってもおいしいお餅がつきあがりました。

椎茸の菌うち。初めの内は談笑しながらの作業も、気がつくとコンコンコンという乾いた音だけが周りに鳴り響いていました。

イベント日程

★『植樹&横井戸修復』
・三月八日（日）　十時～十五時半

★『畦塗』
・四月十一日（土）　十時～十六時
　十二日（日）　※各日日帰り

☆『ヨモギ餅作り』
・四月十八日（土）　十四時～十六時半

◎『巨木巡りトレッキング』
・四月二十六日（日）　十三時～十六時

◆『サツマイモ植え&レングトレッキング』
・五月二日（土）　十三時～十六時

★『田植え』
・五月十六日（土）　十時～十六時
　十七日（日）　※各日日帰り

◆『古代米田植え&補植』
・五月二十三日（土）　十五時半～十八時半
　二十四日（日）　※各日日帰り

◎『田んぼの水路の生物観察』
・五月三十日（土）　十三時～十六時

□草取り&ホタル観賞』
・六月十三日(土)　十一時～二十時
　二十七日（土）　※各日日帰り

■『草取り&ホタル観賞』×二食付（夕・朝）
・六月二十日（土）十一時～翌十一時
　二十一日（日）　※一泊二日

◇『ゲンジボタル観察』
・七月五日（日）　十八時半～二十時

◎『里山の昆虫探し』
・八月四日（火）　十時～十三時

古代米もデザインを一新しました

昨年に「里山米」のラベルデザイン変更に伴い、古代米のラベルも新しくなりました。袋も利便さを考え自立するチャック付きのものにしました。去年より販売していました「いろいろ米（赤・緑・黒・紫ブレンドしたもの）」はつきみもちの玄米を加えて「五色米」となりました。種まきから天日干し、パッキングに至るまですべて手作業で行っています。そのため数に限りがございます。お寺にお参りにいらした際、また「里山米」ご注文の際には是非お買い求めください。

赤米はうるち種。黒、紫、緑はもち種です。

もち米の「つきみもち（品種名）」はとても甘いです。‘五色米’は古代米４種ともち玄米をブレンドしています。

古代米・もち米

【種類】赤米・緑米・黒米・紫米・もち米
【価格】赤米/緑米/二百五十円
黒米/三百円
紫米/三百五十円

※各百五十グラム

もち米/二百五十円
五色米（五種ブレンド）/六百円

※各三百グラム

※古代米・もち米共に農薬、肥料はこしひかりと同じ

お米まだまだ販売しています

里山米（残り千二百ｋｇほど）

【品種】こしひかり
【農薬】いもち病予防の種子消毒のみ
【肥料】有機肥料
【精米】一時間かけて低温で自家精米
【価格】二キロまで　玄米　六百円/kg
二キロまで　白米　六百五十円/kg
三キロ以上　玄米　五百五十円/kg
三キロ以上　白米　六百円/kg

☆玄米の残留農薬検査の結果（自主検査）
二百五十項目の農薬　検出せず

☆玄米の放射線測定結果（自主検査）
ヨウ素・セシウム１３４・セシウム１３７検出せず
（検出限界値　１ベクレル/kg）

☆収益金は「上総自然学校」の里山再生活動費に充当します。

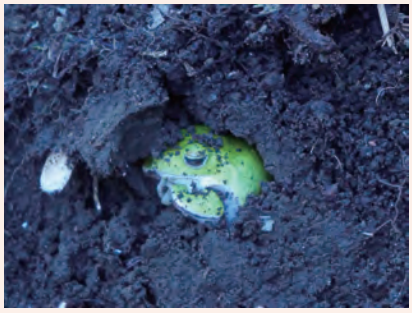
【ご注文方法】
①氏名 ②住所 ③電話番号 ④白米か玄米　⑤数量（二キログラム以上一キロ単位）を明記し、ファックス・電話・メールにてお申込みください。（連絡先は最後のページに記載あり）

〈参加費〉
各イベント名の下にある記号です。
■大人 六千円/小学生 三千円
□大人 三千円/小学生 千五百円
★大人 二千円/小学生 千円
◆大人 千円/小学生 五百円
◇千円
☆八百円
◎五百円

〈申込み方法〉
参加される方の①氏名 ②住所 ③連絡先 ④生年月日 ⑤血液型 ⑥緊急連絡先（ご本人様が怪我をした時などの連絡先）を明記の上、メール・ファックス・電話でお申込みください。（連絡先は最後のページに記載があります）

里山の生物

シュレーゲルアオガエル



両生綱無尾目アオガエル科

体長は成体の雄が30～40 mm、雌が40～50 mm。日本固有種である。モリアオガエルとよく似ているが、本種の方が小型であること、虹彩が金色であることから判別できる。水田や森林等に生息し、繁殖期には水田や湖沼に集まる。繁殖期以外は樹上で生活する。繁殖期はおもに４月～５月で畦や乾田の土中に穴を掘り、こぶし大の泡状の卵塊を産み付ける。降雨と泡は溶け出し孵化した幼生は水中生活を始める。寿命は５年以上。冬眠は浅い土中で行う。

千葉県レッドリスト・D
（一般保護生物）

修証義に学ぶ

今回は道元禅師の平等観について考えてみます。『修証義』の第四章「発願利生」には、「たとい七歳の女流なりともすなわち四衆の導師なり（七歳の女の子も仏教の導師である）、衆生の慈父なり、男女を論ずることなかれ、これ仏道極妙の法則なり」という言葉があります。この言葉は男性上位、女性下位、女性は穢れているという差別思想が当たり前のものとされていた時代性の中で、道元禅師の発せられた明快な男女平等観を示す、短いけれどもとても大切な言葉です。

平等とは

辞書で平等という言葉を引きますと、「差別がないこと、みんなが同じなこと」とあります。たとえば飲食店の支払いの時に、「今日は平等に割り勘で」といった使い方をする場合には、割り算をすれば正確な平等を実現することができます。しかし「人間は皆平等」といった場合には、なかなか難しい問題があります。人それぞれに体型も違えば顔の形も違いますし、得手不得手もあるからです。もっとも金銭の負担を平等にすると言っても、百円しか持っていない人が十円の負担をすることと、一万円持っている人が十円負担することが平等といえるのかという、数字で割り切れない問題もおこります。また平等に同じ仕事をしても一時間かかる人もいれば、二時間かかる人もいます。また上手にできる人もいれば、上手にできない人もいます。同じ時間仕事をしたのだから、同じ報酬であることが平等なのかという問題もでてきます。数字で割り切ることのできない人間の平等を実現することは大変なことです。

たとえ同じ人間であっても、個々にまったく違う特徴を持っているのです。元来違うものをひとからげにして、全員が同じであるという平等観をあてはめると、あつれきが起きてしまいます。さらに同じようにできない人を蔑んで自分より下等のものとしたりする差別を生んでいくことになってしまいます。

辞書では「平等」という言葉について、「差別がないこと」と記してあります。同和問題、人種差別、職業差別、男女差別などの諸問題が根強く残り、悲しい思いをしている人がまだまだたくさんいる今日にあって、本当の平等とはどういうことなのかを考えるのは、よりよい社会を作るために避けては通れないことです。さらに自分自身もいつ差別を受け悲しい思いをするかもわかりませんから、これに取り組んで具体的な行動をし、差別しない社会を実現していくことは、どうしても行わなければならないことといえます。

さて姿形も能力も違う人間同士が平等であるとの思想をもち、差別のない社会を実現するには、なぜ人は平等なのかという理由を明らかにしなければなりません。法治国家にあっては、法の下に平等です。誰しも生きる権利を持ち、さらに人間の尊厳を保ち、文化的に生きていく権利を持っているということは私たちの共通認識になっています。

神様をたてる宗教にあっては神の下の平等という思想があります。神を信じる人間は誰しも平等ですが、神が人間のために作られたとされる動物には、当然人間と同等の権利はありません。

縁起による平等

仏教は縁起観による平等という思想を持っています。これまでもたびたび申し上げましたが、縁とは接着剤のようなもので、条件と調和とも言い換えることができます。縁起とはすべてのものは結びつきによってこの世に仮に出現しているという思想で、私たちは一人一人が縁という力によって支えられて存在していて、同じ存在は二つとありません。（平等不二）。動物や植物も同様です。すべての存在はすばらしい縁によって二つとない命を持って生きているということになります。二つとない命は存在において絶対平等です。ですから、これはすばらしくてこれは劣っているという判定などつけられるはずもありません。

ところが実際はどうでしょう。私たちは存在のすべてに対して、優劣、大小、用不要などのレッテルを貼り、ましてや浄、不浄などと色眼鏡で見てしまいます。仏教では本来平等なものを人間の色眼鏡で差別していくことを煩悩とよび、その煩悩によって人は苦しんでいると解きます。仏教は抜苦の宗教ですから、煩悩を滅して存在の原点であるところの平等を自己の中で実現し、苦しみから解脱し成仏しなければなりません。ですからありのままにみること、差別しないことが仏教徒の永遠のテーマであるといえます。

しかし残念ながら仏教教団においても差別は存

在します。とりわけ女性はさとりをひらくことができない不浄な存在であると説いた偽経（にせのお経）さえ存在するように、女性差別は仏教の歴史の中で公然と行われてきました。それらの誤りはきちんと整理し、是正していかなければなりません。

お釈迦様の説示に次のようなものがあります。

「すべてものは暴力におびえている。すべてのものは死をおそれている。（他人を）自分の身にひきあてて、殺してはならない。殺させてはならない」（ダンマパダ）

「私」と同じように縁が集まってできている「他」という存在は、「私」と同じようにその縁の崩壊を恐れています。病や死はその最たるものといえます。「私」と同じような存在だから、「私」の身にひきあてて考えていこうというお示しです。「私」にだって得手不得手があるはずです。同じように他人にも得手不得手があります。男性であるとか、女性であるとか、仕事が遅いとか、不器用であるとかはいってみれば、存在の特徴のようなものです。縁があればでき、縁がなければできないのです。できないことを劣と見ることは煩悩です。自分の身にひきあててみればわかることではないでしょうか。自分が劣っていると思っていることをことさらに指摘されれば誰だって腹がたつはずです。自分の身にひきあてれば、人より劣っていることをあげつらうことなどできようはずはありません。ましてやいわれなき差別など、できようはずもありません。つまり自分の身にひきあてて他を認めることこそ、仏教的な縁起による平等観の要点といえると思います。

かたよりのない眼でものごとを見る

『正法眼蔵　礼拝得髄』の巻の中で道元禅師は、法を得てさとりをひらいたものならば、どんな存在であっても、礼拝してその教えを受けるべきである、たとえ草木であっても得るところがあれば礼拝し教えをいただくべきで、それがすなわち自分自身のためになっていくということを強調されています。「礼拝得髄」は、道元禅師が当時の女性差別に真っ向から異を唱えられた一巻として大変有名なもので、たとえば男性の僧侶が女性の僧侶に教えを請わないことについて、男は女を礼拝してはならないなどという者は仏の道をまったくわかっていないと批判され、末山尼了然、妙信尼という二人の女性の禅匠の下で男僧がさとりをひらいた逸話を紹介しています。

そして「仏法を修行し、仏法を道取せんは、たとひ七歳の女流なりとも、すなわち四衆の導師なり、衆生の慈父なり、（中略）供養恭敬せんこと諸仏如来にひとしかるべし」と喝破されます。これが冒頭に引用した『修証義』の原文になっているわけです。

私が注目したいのは、永平寺に残された二十八巻の『秘密正法眼蔵』にだけ存在する「礼拝得髄」の巻の後半の文章です。この中で道元禅師は日本には女帝がいたが、これは人を敬うのではなく、位を敬うのである。同様に僧侶は形ではなく法を得ているかどうかを唯一の目安とするのだと説かれます。また、当時の仏教界には、皇族や貴族が出家するとそれに取り入ったり世話をする僧侶がいたようですが、そういう輩は僧侶とは似て非なるものである、なぜなら仏法やさとりに重きを置かず、権力におもねり、名利を求めるものは僧侶とはいえないからだと、修行の有無に関わらず高位に奉られた皇室や貴族出身の僧侶と、それに阿諛追従を重ねる僧侶への痛烈な批判を書き連ねられています。

男性と女性がお互いに嫌い合っていて、どうして仏道を得ることなどができようかという問いかけからは、道元禅師の激しい憤りが感じられます。「女人のなにのとがある、男子のなにの徳ある、悪人は男子も悪人なるあり、善人は女人も善人なるあり」。私も知らず知らずのうちに男だから、女だからというように色眼鏡をかけたものの見方をしていることがありますが、この言葉はそうしたことへの戒めとも思えます。

道元禅師はさらにこういいます。「日本国にひとつのわらいごとあり」。女人禁制の結界をもうけることについて、「わらわば人の腸もたえぬべし」とまであざけっているのです。本来の意味も知らずに結界という言葉を使っているが、その中では男が悪いことばかりしているではないかというのですから、当時としてはきわめて過激な仏教界批判であろうと思います。

「礼拝得髄」の巻の内容は、一二四〇年に道元禅師が初めて開かれた道場である京都は宇治の興聖寺で人々に語られたものであるといわれています。道元禅師の仏法は都で評判になり、興聖寺にはたくさんの人々がつめかけましたが、その人々の前でこのように痛烈な批判が繰り広げられたのですから、旧来の仏教からは相当に疎まれ、さまざまな攻撃も受けたのではないかと思います。結果として、ついには京都にいられなくなったのでしょう。その三年後には道元禅師は京都を

離れ、山深い越前の永平寺に入られます。

おわりに

『下流社会』といういやな題名の本が飛ぶように売れているそうです。また、テレビや雑誌では「勝ち組」とか「セレブ」といった言葉がもてはやされています。今の日本は、政治の主導もあって再び家柄や身分で人間の価値を判断する社会へと戻りつつあるように思えてなりません。そのような世相であるからこそ、危険をもかえりみずに本当の平等を説かれた道元禅師の仏法をよりどころとして自らの心に刻みつけ、日日怠らずにしっかりと学んでいくことが大切なのではないかと思うのです。

東長寺「萬亀」掲載文

平成二十七年年回表

周	回	忌	
一	三	七	百
三	七	十三	五十
七	十三	二十七	三十三
十三	二十七	三十三	五十
二十七	三十三	五十	百
三十三	五十	百	
五十	百		
百			

忌		
平成	二十六	年
平成	二十五	年
平成	二十一	年
平成	十五	年
平成	十一	年
平成	元	年
平成	五	年
昭和	五十八	年
昭和	五十四	年
昭和	四十一	年
大正	五	年

行　事　予　定

ヨ　ガ　教　室 《どなたでも参加できます》

日時：毎月 1 回不定期開催
費用：3,000 円程度
　　（内容によって費用が変わります。）
場所：真光寺

お寺ヨガではヨガのみならず、坐禅、写経、精進料理などなどと組み合わせて、それらを通して仏教に触れ、学びを深めていきます。緑に囲まれた静かな環境でヨガができる贅沢さが魅力です。

こちらは毎月一回不定期で行われています。ご参加をご希望の方は真光寺まで

坐禅も人気です

仏像彫刻体験教室 《どなたでも参加できます》

日時：毎月第 1 ・第 3 水曜日
　　13 時 30 分～ 16 時 30 分
費用：3,500 円 / 1 回参加
場所:真光寺(参加者が 3 名以上で開催となります。)

仏師の方にご指導頂き仏像を彫っていきます。教室では初めての方でもご参加いただけるように、彫刻刀の研ぎ方から始め、地紋彫りで基本の小刀の使い方を一通り体験し、彫刻刀の制作からはじまり、お地蔵さん、仏足、仏手、仏頭とそれぞれの方に応じたペースで徐々に立体に取り組みます。どなた様でもご参加頂けます。

丁寧にご指導いたします

寺のある暮らし 《檀信徒・縁の会会員》

日時：4 月 20 日 11 時集合～ 21 日 13 時解散
　　（一泊二日）
費用：7,000 円
場所：真光寺

朝のお勤めと、食事、就寝以外は自由です。イベントも用意してあり、畑作業、庭いじり、里山散策、囲碁など自由な時間を過ごせます。

精進料理と聖典講読の会 《檀信徒・縁の会会員》

日時：3 月 30 日・4 月 30 日・5 月 28 日・6 月 30 日
　　午前 11 時～午後 2 時半
費用：3,000 円（昼食付）
場所：真光寺
テキスト：修証義　（仏教徒教典）

住職による修証義解説の後、一緒に食事をして、午後は坐禅や写経をいたします。どちらも老若男女問わず気軽にご参加申込み下さい。

行　事　予　定

山門春彼岸法会 《檀信徒》

日時：3 月 22 日（日）14 時より
春のお彼岸供養を行います。法要後には余興を予定しています。

花まつり法要・檀信徒総会 《檀信徒》

日時：4 月 5 日（日）11 時より
お釈迦様の誕生を祝います。法要後に檀信徒総会を行います。

七日法要 《縁の会会員》

日時：4 月 4 日（土）　11 時より授戒式・月例供養、午後は植樹祭と花まつり法要をします。
　　5 月 7 日（木）　11 時より授戒式・月例供養、午後は坐禅・写経・写仏
　　6 月 7 日（日）　5 月と同じ日程
　　7 月 5 日（日）　11 時より授戒式・月例供養、午後は施食法要を行います。
　　8 月 2 日（日）　11 時より午前の部 施食法要、午後 1 時半より午後の部 施食法要。
※昼食準備の都合上、ご出席いただく場合は必ずお電話でご予約下さい。午前のみ、午後のみの出席もできます。
※電車・バスで来られる方は送迎を致します。お電話等で申し込み下さい。送迎時間は次頁に掲載しています。
※7 月、8 月の施食法要につきましては、次号の寺報にて詳細をご案内いたします。

縁の会合同春彼岸法会 《縁の会会員》

日時：3 月 21 日（土）　11 時より
縁の会合同での春彼岸法要を行います。亡き人、御先祖様の御供養を致します。お塔婆お受けいたします。
※昼食準備の都合上、ご出席いただく場合は必ずお電話でご予約下さい。
※電車・バスで来られる方は送迎を致します。お電話等で申し込み下さい。送迎時間につきましては七日法要の送迎時間に準じます、次頁に掲載しております。

葬儀セミナー 《檀信徒・縁の会合同》

日時：3 月 21 日（日）13 時半より
突然のお葬儀に備えて、シミュレーションや費用のお見積もりも含めセミナーを行います。
詳細は同封の葬儀セミナーのご案内をご覧下さい。

真光寺囲碁の会 《檀信徒・縁の会合同》

日時：3 月 26 日（木）14 時集合　～ 27 日（金）13 時 30 分解散
費用：8,000 円　1 泊 3 食　定員 10 名
場所：真光寺
静かなお寺で自由に囲碁を打って頂き、息抜には里山散策などもできます。初心者の方大歓迎です（住職も初心者です）。お電話等でお申し込み下さい。

紫陽花の参道造り《植樹》 《檀信徒・縁の会合同》

日時：4 月 27 日（月）　植樹　午前 11 時より午後 2 時半解散　送迎時間は七日法要に準じます。
　　6 月 25 日（木）　さし木 午前 11 時より午後 2 時半解散
　　7 月 23 日（木）　ポット取り　午前 11 時より午後 2 時半解散
費用：1,000 円　昼食 精進料理
場所：真光寺
紫陽花の咲き乱れる参道を造るため、毎年さし木をしておりますが、職員の手だけではなかなか増えず、檀信徒、縁の会の皆さまの手をお借りして、紫陽花の参道作りを行います。昼食は精進料理をご用意いたします。皆さまのご尽力をお願い申し上げます。

ご詠歌練習日 《檀信徒・縁の会合同》

3 月　10 日・24 日
4 月　14 日・28 日
5 月　12 日・26 日
6 月　 9 日・23 日
7 月　 7 日・21 日

場所　真光寺
時間　19 時半より（5 月以降は 20 時より）
※ご詠歌はどなたでもご参加できます。気軽にお問い合わせください。

特別企画

道元禅師修行の地 中国 天童寺参拝旅行

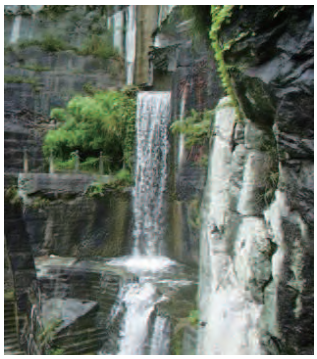
日本の曹洞宗の開祖として敬われる道元禅師は、24歳（1223年）で博多を出航し、28歳（1227年）で帰国するまでの4年間を、中国で修行しました。本年の真光寺の旅行は、特別企画といたしまして、道元禅師の修行の地である、天童寺・阿育王寺・大仏寺や天台宗発祥の地、天台山国清寺を参拝いたします。

檀信徒、縁の会の皆様、ご縁者の皆様、是非この機会にお誘い合わせの上ご参加下さい。

天童寺の眺望

阿育王寺

大仏寺



送迎のご案内【七日法要】

□電車の方

・上り電車の方（君津発千葉行き）
JR内房線「袖ヶ浦駅」10時06分着

・下り電車の方（快速君津行き）
JR内房線「袖ヶ浦駅」10時12分着

□バスの方

【土日祝】

・品川発9時30分→袖ヶ浦BT10時15分着
・横浜発9時30分→袖ヶ浦BT10時09分着
・川崎発9時25分→袖ヶ浦BT10時14分着
・新宿発9時05分→袖ヶ浦BT10時08分着

【平　日】

・品川発9時25分→袖ヶ浦BT10時10分着
・横浜発9時30分→袖ヶ浦BT10時09分着
・川崎発9時15分→袖ヶ浦BT10時04分着
・新宿発9時05分→袖ヶ浦BT10時08分着

□お車の方

10時40分頃までにお越し下さい。

◆旅行期間：平成27年6月11日（木）
～6月15日（月）

◆旅行代金：160,000円
（1名1室利用は33,000円追加）

◆募集人数：20名（最少催行人員10名）

◆申込方法：3月31日までに申込金20,000円を添えてお申し込み下さい。

※その他の詳細は同封の団参旅行案内をご参照ください。

各種お申込み連絡先

真光寺　〒299-0201 千葉県袖ヶ浦市川原井634
TEL 0438-75-7414（代表） TEL 0438-75-7365（縁の会事務局） FAX 0438-75-7630
e-mail ennokai@shinko-ji.jp（縁の会）　satoyama@shinko-ji.jp（上総自然学校）